

「メディアウォッチング」例会 2016年3月23日（水）

38回 『民間放送のかがやいていたころ～ゼロからの歴史 51人の証言』出版の反響

- テーマ ① 放送人51人の聞き取り取材及び「証言集」出版の講評・反響
② 「メディアウォッチング」今後の活動目標

冒頭、司会者から『民間放送のかがやいていたころ～ゼロからの歴史 51人の証言』（672ページ）出版に関する経過説明があった（昨年5月以来の久しぶりの例会）。

本を出版するに当たり、高橋信三記念放送文化振興基金に2014年度、2015年度と2年続けて応募、事業研究内容が認められ助成を受ける。さらに放送文化基金からも、基金の助成が認められた。

出版社は、主に学術書を扱っている大阪公立大学共同出版会（OMUP）に依頼。初版1050部。大手書店の紀伊国屋、ジュンク堂、そしてアマゾンでも扱っている。放送人51人への聞き取りは世話人4人が行い、2013年秋から関西民放クラブ会員の協力を得て対象者の人選を始め、聞き取り取材、編集、構成、校正、そして出版（2015年10月9日）に至るまで約2年を要した。

<関西民放クラブならではの仕事 『放送人51人の証言集』>

（新会員 浜本忠義氏の紹介のあと）『民間放送のかがやいていたころ』の「はじめに」を執筆した北野栄三氏（前関西民放クラブ会長）から本書の出版についてひと言。「この本の成り立ちについては、世話人の方々の大変なご努力があつて形になりました。私はやれやれと言っただけで、聞き取り、活字化、編集といった作業は世話人が中心になって進めていただき感謝しています。関西民放クラブとして何かやろうというのが、そもそものはじめできっかけでありましたが、こういうものが残せたのは西村嘉郎会長もおっしゃっていたように、関西民放クラブならではの仕事であったなと思っております。これを進めていただいた皆さんに感謝いたします」。

司会 もちろん我々はいろんな作業をただけであり、例会に来てくださった皆さん、それに個別に聞き取りの取材に応じてくださった先輩方の協力があつての本じゃないかと、考えております。それではご出席者の聞き取りにご協力いただいた方から、本に対する反響なり、感想を聞かせていただきます。

<NHK金沢局から素材提供の依頼 『お荷物小荷物』（ABC制作）>

出席者 私は文字面では脱・ドラマが生まれるまでという形の一篇を頂戴して、話をさせて

いただきました。書きましたように「お荷物小荷物」（朝日放送制作）は佐々木守さんの脚本です。佐々木さんは大変能力のある作家で、彼とがっちり組んで出来上がった番組でした（佐々木守氏は2006年2月24日死去）。私は弔辞を頼まれたこともあり、ご遺族とも親しくさせていただいておりましたので、本を読んでくださいとご遺族宛てにお送りしました。そうしましたら、たまたま佐々木守さん、石川県の根上町（現能美市）の出身なんです、亡くなられて丁度10年になるんです。出身地のあの界限では大変な名士ということもあって、地元のNHK金沢局が亡くなって10周年の記念番組を作りたいということで、ご家族のほうに相談があり、そちらにも連絡があるということでした。佐々木さんはジャンルの広い方でしたから、NHKではいろいろ企画を練り始め、当初は子供に関する番組を考えていたようですが、ご遺族からこの本を渡され、ドラマにも触れたいということになったのです。NHKのプロデューサーから電話があり、ABCの担当者に橋渡ししました。当時のドラマはもう1本しか残っていなかったんですが、まあ、お金のこともあったのか、ドラマをそっくり紹介するということまでいかなかったと思います。私はNHK金沢局の作った番組は見ていないんですが、写真その他を協力してほしいという依頼がNHKからあったそうです。放送は2月に終わっております。まあそんな反響がありました。おかげさまでございます。

出席者 今日、聞き取りの対象者でいらっしゃる方もおられますので、反響があれば伺ったらどうでしょうか。

出席者 そんな本があったら、ぜひ読みたいというタレントが何人かやっぱりいました。

<先輩たちの“荒っぽい”作り方 若い制作者が高い評価>

出席者 私の場合、日本万国博開会式の共同中継（在阪4社）の話をしました。メインのプロデューサーを技術的な面からサポートするという横に座っていたのですが、それが私も聞き取りの対象者としてお話することになりました。それから現役の人たちの本に対する評価ですが、今の局長クラス、部長クラスは当然（本に書かれている時代を）共有しており、当時の放送現場のことは理解しています。ところが、最近入社してきた主任、課長クラスの若い人の中には、本を読んで「へー、非常に荒っぽいことをしていたんですね」と、どう作っていいのかも分からない手作りの時代のラジオやテレビの現状を知って、驚いていました。今は言うならば、道具立ても含めて完璧にそろっているのに、“荒っぽさ”がなくて、一つひとつの番組の出来あがり磨きのかかった、きれいな番組になってしまっている。昔の番組は、そういう意味では荒っぽいが作っている側の“思い”や“体温”が逆に表面によく出ていたのではないかと、若い人たちが評価していました。

ところで私は現在、関西民放クラブのホームページの編集、制作に携わっているのですが、民放を卒業した OB・OG たちが“今の放送”について、これだけこだわっているよという雰囲気何とかホームページに出せないか、また今日、まとめていただいたたくさんの資料をホームページにアップできないかと思っています。ホームページというのは、その日、その日、その週、その週、常に新しい情報が出ているというイメージをもっているのですが、こうしてみると、ホームページも歴史を感じさせる、たまった情報を、あるいは古いものを検索して探すことが出来る、そういう機能があるんだなと改めて感じています。関西民放クラブのホームページが、この「メディアウオッチング」の活動をウオッチングしていきたいと思っています。

司会 今の放送現場の方が、本を読んでくれているのはありがたい。そういう年代の人たちに一番読んで欲しいですね。

<病床の先輩に読み聞かせ “感動した”と介護の娘さんから電話>

出席者 私はラジオ単営局で、なおかつ後発局でしたので、ラジオ開局当初の番組作りのこと、当時珍しかった電話を使った「人生相談」の番組について話しました。実は、私が開局のときから一緒に仕事をした上司であった人が、今ちょっと病気療養中で外にも出られないという状態になっておりましたので、本を送ったんです。そうすると、介護している娘さんから、本を読むのも無理だということで、お父さんにあの本を読み聞かせたという電話をいただきました。大変喜んで感動したと話しておられ、よかったなと今思っています。もうすでに亡くなった方、いろんな方がいらっしゃるの、そういう方たちのためにも、この本が出版出来て本当によかったなと思っています。

出席者 私は、昭和 44 年開局のローカル局（U 局）ですから、先輩方の局と全然違う放送局にいたことになります。ズーと本を読み、懐かしく思いながらも、丁度私は、昭和 57（1982）年から 2000 年まで熊本にいて、阪神淡路大震災の実体験がないうえ、実は本の中で何人かの人が語っている番組も見えていないんです。だから、なるほど私のいない間（関西）にこんな番組が放送されていたのかということと、やっぱり本流でなかったな、民放の U 局からすると、ある意味うらやましいなと感じながらあの本を読みました。若干どこかに視聴者の立場、感覚的には部外者なんだなということを率直に感じました。

<苦勞して一人前に育っていく過程が見えてきた 51 人の証言集>

出席者 私も同じような感じなんです。日経新聞で文化担当の部長をやっていて、衛星時代

に入って、地上波放送がどうなるのかなど関心を持っていました。たまたま、放送に関心があるなら、電波業界に行ってはどうかという打診があり、岡山に本社があるテレビ東京系の放送会社に行くことになりました。経済力のないテレビ局で、そこへ行って立て直して来いというわけです。観察者として衛星放送時代のテレビ事業を見てきましたが、実際に入ってみると、これまで描いていた現場とは違うんですね。こういう環境の変化がありまして、それから親身になってテレビと向き合うことになるのです。岡山のローカル局に10年ぐらいいました。そのあと北海道のテレビ局（日本経済新聞系）に行き、監査役をやっていたので、実は関西の放送局が制作したテレビ番組やラジオ番組のことはほとんど知らなかったんです。この本に接し、いろんな人が思い出を語ってくれていることによって、私の知らない番組の制作意図、具体化の過程などを知ることになりました。

準キー局である在阪のテレビ局や関西のラジオ局が非常に苦勞して一人前になっていくという過程が見えてきたように思います。ラジオ、テレビともにいろんな形で苦勞が読み取れ、非常に良い本だと思います。この会に出席して現場で話を聞いていると、あの本に記されている以上にもっと苦勞話があったような気がします。一つの時代を画するものとして、こういうものが一つにまとまっているということは、非常にいいことだし、皆さんの努力で認識が広まっているということは素晴らしいことだと思います。

ただこれから、関西の放送局は一体何が出来るのかなとちょっと心配です。テレビ自体がどうなるのか、心配の面もあります。その辺の先をマスコミの一員としてどう見るか、どう考えるか、私もテレビを見ながら考えたいんですが、テレビはスポーツぐらいしか見ない、面白くなってきたので。その意味でも、若い人たちにぜひこの本を読んで欲しいと思っています。

<番組作りの普遍的な部分がぎっしり 若い人たちの必読書>

出席者 これは凄く良い仕事だと思います。関西の民放の歴史的な部分はかなり価値もあり、皆さんが語っておられる番組作りの基本というか、普遍的な部分が結構ありまして、若い制作者にぜひ読んでほしい一冊になっています。わが社は今視聴率的に低迷しているんですが、その苦しいときの脱却方法がこの本の中にいっぱい詰まっています。先ほどから皆さんが話されていますが、今のテレビ番組は手触りがよく、凄くきれいに仕上がっている、しかしそれ以上のものが伝わってこない。むしろ、手づくりでがたがたしているほうがインパクトがあり、心に伝わってきます。今の現場の若い人は視聴率の分析、数字の分析に一生懸命エネルギーを費やしているが、そこからは根本的な解決策は見いだせないし、琴線に触れるような番組は生まれてこないと思います。

本の中で関西テレビの先輩の野添さんが言われていたように、当時は（制作者が）

“作りたいものが作れた時代”でした。今はそれが出来ないようです。番組作りの環境がずいぶん変わっていますので、どうしたらいいか、簡単に答えを導きだせないですね。

<カラー化への変革など歴史的な掘り起こし やや物足りない>

出席者 (本については) もの凄く苦勞をなさって、非常に思い込み、思い入れが強いので、余計なことを言うと、怒られるかましませんが、言ってもいいですか。(言ってください)。

実は、先ほど(テレビというのは)“今のものだから、過去を語っても仕方がない”という言い方をされましたが、まさにそれはそうだと思います。

ただ、番組というのは(私が思いますのは)個人商店ですね。どんな店を出して、どんな商品売って、“どうだ、客よ来い”という、すべてプロデューサー、ディレクターの世界ですから。個々にいろんなことをお考えになったり、お感じになったりしておられますが、個人商店の世界なんです。だからテレビ全体を考えると、これを線でどう結び付けていくかというのが、これからの問題だと思います。

私は2インチのVTRの時代から、1インチへ、それからカラー化、デジタル化、この過程をずっと体験してきました。カラー化とデジタル化はテレビにおける産業革命みたいなものだと思います。

OBとして伝えられるのは、先ほども言われていた普遍的な部分、(テレビ番組作りの)手法とか、組織のあり方というのが全く変わっていないのはテレビ局なんです。封建的で保守的。先ず組織のあり方を変えないといけない。ネットワークもこんなに多くいない。本の中でABCの山内久司さんが言っておられましたが、二つでいいと。僕は民放が二つ、それとNHK一つでいいと思います。それと新聞との決別、これはぜひやらないと。

本のことで注文があるとすれば、(テレビの)歴史の部分が少し物足りなかった。カラー化のときにみんなどれだけ苦勞したか、制作の人間は、私はバラエティー番組を作っていましたので、バラエティーとかテレビドラマを作っている人は、カラー化になることにもの凄く気持ちが高揚していたんです。ここに色が付くんだとか。多分報道の世界でも表現方法の変化があったと思います。事件現場で“血”の映像をどのように扱ったらいいとか。どこまで放送に出していいものかなど。そんな話もほしかったし、これは結果論ですから、注文を付けたら、きりが無いと思いますが、やっぱりカラー化、デジタル化といった一つの区切りのところで感じた部分がもう少しほしいなと思いました。

(私の感想ですが) デジタル化でテレビは完全にダメになってしまいました。それはなぜかという、テレビ画面を大事にしなくなったからです。テレビの画面が4対3から9対16に大きくなったとき、あれだけ空き地(空いたスペース)がいつ

ばい出来たのに文字で全部埋めることしか考えていない。これが一番ダメになった理由です。スーパーの文字もでかくなりました。4対3のときは、そのフレームの中でもうちょっと画面作り考えて作っていました。

そこら辺の部分はOBがもっと叱っていいのではないかと。若者たちは今の時代でもっと「かがやいてほしい」と思います。

私はこの本を天満橋の「ジュンク堂」で購入しました。しっかり読み込み、付箋がだらけになっています。

ただ一つだけ知ってほしいのですが、私は、「ヤングおー！おー！」の企画の段階からかかわり、オーディションにも立ち会いました。それから二代目のプロデューサーをやりました（初代プロデューサー中邨秀雄・吉本興業、林誠一・毎日放送）。

「ヤングおー！おー！」というのは、斎藤努氏が本の中で語っているより、もっと熱を込めて作っていたんです。当時は「若者のチャンネルを奪え」というサブタイトルが付いていたんです。これは毎日放送の人でも知っている人は少ない。（今でもそうですが）、若者をチャンネルに引き戻そうというお考えのようですが、そんな無駄なことはやめたほうがいいと思います。あの時代は特にそうでした。学生運動の激しいところで、収録現場に石が飛んでくる時代でした。

ただ打算的には、あの番組は吉本興業が若手の登竜門として非常にうまくお使いになって、随分いろんなタレントが育ち、デビューしていったのも事実です。

司会 先ほど、若者をテレビに取り戻せというそんな無駄なことをよしなさいと言われてきましたが、私も全く同感です。それではどういう風にすればいいか。

<生（ナマ）と番組の幅広さ テレビの普遍性>

出席者 私は、作る人間が個人商店として若者向きの洋服を売っても構わないと思います。いい服を売ると、若者だけじゃなく必ずいろんな人がいっぱい集まってくる。現実に「ヤングおー！おー！」は“若者チャンネルを奪え”、を目標に一生懸命やっていましたが、見ている人の層はもの凄く幅広かったですね。それはお笑いというのがベースにあったからかもしれません。歌は演歌からアイドルまでありました。テレビの普遍的なものというのは、生（ナマ）と幅の広さだと思います。ターゲットを絞るのは、制作する側（送り手側）の一つの手法であって、見る側にターゲットを絞って、あんた方見なさいよ、というやり方ではなくて、視聴者に申し訳ないが、一つのえさみたいのものです。ターゲットを絞った番組の作り方も当然あってもいい。しかし現実にはかつてのような「子供の時間」「大人の時間」「主婦の時間」といった割り振りは今や民放の編成には見られません。

出席者 ヤングというので思い出したのですが、朝日放送の元プロデューサー（「必殺」シ

リーズ) 山内久司さんが、以前この会に出て (2010年1月10日)、ジャニーズを起用している今の「必殺」に触れ、苦言を呈しておられました。

山内氏の発言

「(私がやっていたころの)『必殺』は、はじめは“日常”を描き、そして最後のヤマ場で“異次元”の世界に入り、人々の興奮を呼び、同情を呼ぶというコンセプトになっている。ところが最近の『必殺』、ジャニーズの『必殺 2007年』を見ていると、はじめから異次元の世界を描いている。人気者のジャニーズを起用するということですでに間違いがあると思う」。

つまり、ジャニーズというのは最初から異次元の世界にいる人だと山内さんが言っていた。今テレビを見ていると、どこのテレビ番組を見ている、ジャニーズばかりなんですよ。何故そこまでジャニーズに支配されなければならないのか。

山内さんの言われた、タレントの選抜から、筋の作り方、そういうことを制作現場の作り手は考えていない、きめの細かさに欠けると指摘されたのが凄く印象に残っているんですよ。(「計算がないんだ」の声)

要はタレントで受けようとしている。何か底が浅いというか、そういうことを感じます。

<タレント主導型から抜け出す方法は 番組の“料理人”である制作者の意欲>

出席者 制作に二つのパターンがありますが、「突然ガバチョ！」(毎日放送、1982年)が話題になった頃から、完全にタレント主導型に切り替わってしまいました。

タレントをおさえることが、まずレーティングを取ることだという発想、クライアントもそうですが、これはスポンサーの責任もあります。このタレントがいたら、番組をやってくれますか、OKという発想ですね。タレント主導型は結構、関西の民放のバラエティー番組に多かったと思います。ちょっと言い過ぎかもしれませんが、これがテレビをダメにしちゃった。作り手側の意欲がだんだん、美しくきれいにまとめてしまおうというスタイルに変わってしまったんじゃないですか。

ただジャニーズにしても、他のタレントにしてもちょっと異論というか、今の現役制作者のカバーをすると、見る側、視聴者にもそういったタレントの出ている番組を好む傾向があり、そこから何とか抜け出す方法を考えないといけないと思います。この本の中で、澤田隆治さん(元朝日放送プロデューサー)が「テレビは20~30年大丈夫だ」と言っていましたが、それは30年で消えるという意味ですね。それはやっぱり寂しいので、その生き残るための手段はタレント主導型を切り替えること。それこそ澤田さんの時代は(タレントに対して)“オマエなあ”と呼びつけていました。僕らもそうでしたが、料理人と新鮮な食材をどう求めるかということ、新鮮な食材を壊さないようにどう料理できるかというのが、これが

勝負だったと思います。今は違いますね。(テレビの制作者が) 料理人じゃなくなってきた。そこのところを変えないといけない。

司会 　　というような話、「なぜテレビがつまらなくなってきたか」というところから、2009年にこの会がスターとしております。いわば、原点に戻ったような話でした。それでは、この会をどのように進めていくかが今後の話になってくるんですが、「メディアウォッチング」の一つのテーマとして、かつての放送マン・ウーマンたちが、今どんな番組を見たり、聞いたりしているのか、おすすめのテレビ・ラジオ番組を選ぶという活動を改めて始めようかなと思っています。

<「メディアウォッチング」の活動 放送人 OB・OG が選ぶ“おすすめ番組”>

出席者 　それも含めて「メディアウォッチング」で何をやればいいのか、皆さんはどういうことに興味がおありなのか。こういうことなら毎回出席するよという、ご意見を伺いたいのです。例えば今話題になった“放送人 OB・OG が選ぶおすすめ番組”、この番組はこの点が面白い、といったことを話し合うのも一つの方法なんなんです。それ以外に何か意義のあることがあればご提案ください。

出席者 　「メディアウォッチング」の活動がスタートしたころの話をしますと、我々は放送局の現場から離れた今も“メディア人であり・放送マン”であるという意識を持って、現在の放送についても目を向けているということをやっぱりどこかでやっておかなければいけないと考え、皆さんのご了解を得てこの会がスタートすることになったのです。

ただ民放の OB・OG はどこでもそうかもしれないが、会社をやめたら、そこにはもう出入りもしたくないし、テレビも見たくないし、ラジオも聞きたくない、そういう人が多い。しかし、他の会社とは違うだろう。我々が仕事をしてきたのは放送というジャーナリズム、メディアの仕事であったため、“最近の放送はどうか、世相は”と聞かれても、やっぱりどこかに“生涯放送人”という意識があるんだということを見せたいなという気持ちがありますね。この会に集う人たちの中には“生涯放送人、メディア人”という意識を持った人が多いです。

ですから、ついでに言うと、この本についてまだまだ言いたいこと、注文があるというのであれば、この本を研究することがこれからのテーマかもしれない。

先ほどこの本を読んでいて付箋をいっぱい付けたと言っていたが、その問題点を例えば、関西民放クラブの OB たちで話し合うのもいいかもしれない。この本は「関西民放クラブメディアウォッチング編」になっているんですから。

それからもう一つ、これは「メディアウォッチング」が最初から目指すことにしていたテーマだが、「いい番組」(時には「悪い番組」も含めて)を評価し、我々の目

で採点し、発表したらどうだろうか。

アメリカでは放送・新聞関係者を含むジャーナリスト、制作者の活動を個人別に、星二つ、星一つ、あるいはマイナス評価して、年間賞として発表していたことがあった。我々はものを見る目を持っているとすれば、関西民放クラブメディアウッチャーたちの選んだ「年間大賞ベストテン」を発表するという案もある、そのためには、テレビ、ラジオをそれこそしっかりウオッチングしておかないといけないが。

司会 2009年、この会が立ち上がったときには、まだホームページがなかった。ところが、今我々は発表のツールとして関西民放クラブのホームページがあります。ですから、これを利用してアップデートな情報を発信していけばいい。

放送人 OB・OG が今見ている、聞いている番組はこんな番組ですと。年齢的には結構高くなりますが、そういう風な形で、差し出がましいが、定期的に出していくとそれなりにインパクトがあるんじゃないかなと思います。セレクトした番組をビデオで見て、あるいは音声だとテープにプリントしてみんなで聞き、確認する方法もある。

<「行動する」ウオッチャー 原発問題かかえる福島の放送局取材>

出席者 これまでのように話を聞くだけじゃなしに、「行動する」ということも大事だと思います。例えば、僕はまだ福島（原発、震災）に行ったことがない。やじ馬で行くのが嫌だったのでまだ現場に行っていない。もう 5 年も経ったから、原発の問題をかかえる福島の局の人たちがどういう苦勞をしているのか。おそらく日常的に原発の報道をしているんじゃないかと思うが、大阪や東京には分からない。現地に行って直に話を聞くみたいなこともしていいんじゃないかと思っている。福島や仙台に行って被災地の放送局の現状を知るのも必要か。

年 4 回、例会を開くとすれば、そういうのが年 1 回あってもいいのかなと思っている。皆さんのご意見を伺いたい。

司会 以前のように講師の人に来ていただいて話を聞くというのも続けられればいいと思う。

出席者 僕は関西民放クラブのホームページを拝見して、この本が出版されたのをきっかけに、じゃ一回お勉強に伺おうかなという気になって、入会を決めたんです。趣味の会だったら、これ以上趣味を増やすことはないだろうと敬遠していたんですが。こういう OB・OG がちゃんとまともにテレビ、ラジオと向き合っていらっしゃるんだったら是非とも参加しようと思った次第です。

福島の放送局の人たちに直接会って、ぜひ話を聞くべきだと思います。

<我々は民放史を書き残せる最後の世代 聞き取りの出演依頼中にも先輩亡くなる>

出席者 実は正直申し上げれば、「メディアウオッチング」という会があったのはよく存じておりましたが、私はそこへ入るつもりはありませんでした。なぜ今ここにいるかというと、この本を作るから、どうしても入れと言われて、いやだったけれど入ったんです。それはなぜかと言いますと、このような本は私たちにしか書けない。あとの人はきっと書けない。私はまだ 80 歳にはなっていませんが、あそこに（本）名前が出てくる人の中では私が一番若造だと思っているんです。（聞き取りの対象者になっている人は）ほとんどが 80 歳以上の人ばかりでしょう（70 歳代が中心）。というのは、私の年齢でも一緒に仕事をしていた人はみんな亡くなっているんですよ。私と同年ぐらいの人間が、現場でバカみたいに仕事をしていた人間がみな死んでいるんです。だからちょっと上の人はもういないんですよ。ということはこの本が作れるのはこれが最後だろう。実際に私もそのために頑張ってみました。この本の執筆を依頼しているときに死んじゃうんですから。そうすると今この本が出版されたことに、結果的には、今となっては大変うれしく思わないといけないうらなうと思っています。

（先ほどからテレビのあるべき姿が論じられていますが）だから今から、こうあるべきだ、放送はこうあるべきなんだということを話し合うんだったら、私はえらそうに、そういうことの一員にはなりたくない、そういうことです。

司会 我々は“べきなんだ”という議論をするつもりはないんです。我々が見て楽しい、面白い番組は、こんな番組だよという話をしたいだけなんです。それを現業の人が見て、“ああ、そうか、OB・OG たちはこういう番組を見ているのか”と思ってもらえばいいし、なぜ僕らが作っている番組を見ないのかなと思ってもらえたらもっといいし、それだけの話じゃないかなと思います。

我々も関西民放クラブの中から何か発信したいなというのが本音です。

それから今後の活動の一つとして、スマホ、パソコンなど最先端技術を導入している「今の放送現場」の実情を見るというのもあっていいのではないのでしょうか。

特に放送素材の受信、送信の現状など、我々が放送現場にいた時代とは全く異なる、大変なことが起きている、放送現場を一度見て、知っておくべきだと思っています。

<関西民放クラブの社会的な活動 外部に向けて発信する時代>

出席者 民放クラブの活動としてホームページを作った当初はいわゆる“訪問者（ビジター）”が 100 人とか 200 人程度でしたが、今は毎月 800 から 1000 人に増えています。民放クラブのメンバーが 370 から 380 人ですので、外部の人も半分ぐらい民放クラブのホームページを見ていることになります。この数字を見ると、外に対して発信するツールにもなってきたかなと思っています。ですから「メディアウオッ

チング」の活動をホームページに掲載することは問題ではないが、ただ外部の人が見るということを意識しながら、ホームページの記事を書いたり、写真をセレクトしたりするなど中身を考えることが必要になってきました。我々は非常に真摯な気持ちで議論するということになるが、社会的な意味のある活動を外に発信するのはいいが、逆に、バシッとたたかれることも起きるかもしれない。何でもかんでも掲載すればいい時代から、前へ進んできたのかと思っています。

出席者 あまりテレビを見ないんですが、実は私の家庭でも家内が見るのと、私の見るのでは全然違うんですよ。子供もテレビを見ない。多分昔みたいに家族そろって何かを見る状況ではないと思います。私個人が見て、良かったとか、何かそんな感想は述べられると思うのですが、ただ最近、人によってテレビに対する考え方は随分違うなと感じています。

ラジオもそうなんです。ヤングだからこの番組とか、お年寄りだから深夜放送だとか、そんなことではなくってきている。実態があまりよく分からなくなっている。昔はサラリーマン、主婦とか、聴取対象を絞って制作していましたが、今は多分、制作者がどういう人に見てほしいと言っても、どういう人が見たり、聞いたりしているのかよく分からない。インターネットなどメディアもいろんな分野に広がって、私なんか、ニュースはインターネットで見るほうが多くなっている。テレビでもニュースを見ていますが、ネットへの接触率が高いです。ネットのニュースもヤフーとか、ビッグロブとかでは編集の方針が違うんですね。そういう世界ですから、同じニュースでもいろんな形で大衆に入っているのが実情です。その辺の分析もすれば、面白いかもしれません。テレビの世界だけでニュースだとか、演芸だとかは考えられない、そんな時代になってきています。

司会 OBCはインターネット放送をしているのですか。

出席者 やっています。ラジコで民放各社が放送しています。

また AM ラジオが FM 波を使って放送出来るようになりました (FM 補完放送、ラジオ大阪、MBS ラジオ、ABC ラジオが 3 月 19 日から本放送)。災害対策でやっていると聞いていますが、放送局が期待するほど、一般の人がどれだけ聞いているか、国の方針でそうなってきたんでしょうが。

というように、テレビ、ラジオの状況が大きく変化してきていますので、一つだけの番組を取り上げ、善し悪しを決め、評価していいものか (疑問)。

司会 昨日 (3 月 22 日) の NHK の放送記念日特集「テレビとネット アメリカ最前線リポート」をご覧になった方もあると思いますが、放送現場がすさまじく変化して

います。全部理解された方がどの程度おられるでしょうか、スマホを使っておられる方は少し理解できたのかなと思っています。

出席者 パソコンをやっている人が放送局を立ち上げ、かなりのビジネスになってきたというアメリカのケースを紹介。スマホで撮影、編集し番組化して、俺たちは放送をやるんだ、これがテレビなんだと言っているんですよ。
今テレビ局は、通信と放送の融合とか言って、気持ちがインターネットの方向に向いているが、引き止めないといけないと思う。

出席者 通信と放送の融合と、何の疑問もなく言っているが、僕は通信と放送は融合すべきでないという原稿を朝日新聞に書いたことがある。(NHK の特集は) 新しい映像面だけを並べているだけでどういう考えである番組を作っているのか(その意図が分からない)。

出席者 私は、(彼らは) やっぱりテレビに行くんだなど。通信だと言っているが、彼らはテレビを選ぶんだなど思いました。単にインターネットで発信していただけじゃなしに、やっぱりテレビというツールを使ってみたい、最終的にそこへ(テレビ)いくんだなど思いました。一番新しいネットを使っている彼らがテレビを選ぶということがとても面白かったし、不思議でもありました。

司会 いろんな話が出ましたが、今日お伺いした話を参考にしまして、また世話人で話し合いをさせていただきます。なお、この例会の開催は聞き取りを始める前のインターバルに戻し、年間4回(3月、6月、9月、12月)、バリエーションをつけて開催することにいたします。

【2016年3月31日で降板した古舘キャスターの「報道ステーション」関連の資料と『民間放送のかがやいていたころ』出版に関する反響記事(新聞、雑誌)のコピー配布】

【資料】1 「古舘伊知郎の『報道ステーション』2016年3月31日で終了」関連

- ① 元経産省官僚古賀茂明が出演中に、
安倍政権の「圧力」に言及(2015年3月27日)、その時の古賀氏と古舘キャスターのやり取りを録音で再現及び古賀氏の番組降板の新聞記事(朝日新聞)。この問題がきっかけになり、自民党がテレビ朝日の幹部を呼び出す事態に発展。
- ② 政権のメディア介入 久米宏(元「ニュースステーション」キャスター)のインタビュー記事(毎日新聞)

③ 「古舘キャスターの降板で“主張するニュース”消えるか

放送開始1年目の「報道ステーション」 ある大学生の古舘キャスター評

●キャスターのファッション 僕は普段あまりニュース番組を見ない。「報道ステーション」を放送している時間帯に家に居ることは少ないし、暗いニュースを見たり、聞いたりするのが嫌だということもある。しかし今回改めて「報道ステーション」を見て、自分はこの番組がニュースの中では好きな番組であると思った。とても見やすく面白い番組だ。

その理由の一つには、スタジオの映像（雰囲気）が一つの“絵”として見た場合、硬くて暗くなく（ニュースを伝える装置としては）親しみやすい印象を与えているからである。特に感心したのは、古舘伊知郎の服装が日々お洒落だったことである。堅苦しいネクタイ、スーツ姿ではなく、秋冬の季節感を漂わせるインナーとジャケットで、ラフ過ぎずに柔らかな印象を受け、ニュース番組の重々しい、難しいイメージは画面から感じられなかった。オープニングのテーマ曲にしても、スタジオのセットにしても（古舘ファッションに象徴的にあらわれている“ラフ過ぎず、柔らかな”トーンの）そういうコンセプトをねらっているんだろうなと思った。

（これは古舘キャスターの「報道ステーション」放送開始直後の印象。

今は古舘キャスターのファッションも背広にネクタイ姿に変わっているように、ニュース伝達の姿勢、伝え方も微妙に変化している）。

古舘キャスターは、2016年3月31日の最後の出演で「正直申しますと、窮屈になってきました」と語っている。

④ 「テレビニュースの歴史」（表 1963年～1989年）

資料2 「民間放送のかがやいていたころ」出版に関する新聞、放送専門誌の反響
朝日新聞、産経新聞、毎日新聞、民間放送、放送レポート、GALAC、
図書新聞

講評の一部

「名物番組の裏話や、新しい表現に挑んできた試行錯誤の過程がつづられ、現代のテレビへのエールが込められている」（朝日新聞夕刊、2015年11月13日付）

「民放の創生期を担った放送人の単なる回顧録ではない。ゼロからの出発から得た民放の自由で視聴者に寄り添う番組づくりなど、メディア環境が激変する今だからこそ読み取ってほしい内容である」（「放送レポート」2016年1月1日号）。

以上